

コメディリック第5回「貧乏放し飼い」

「娼婦の願い」

登場人物

輝彦

野彦

リーナ

テオ・ポー

※輝彦、板付き

【L・明転】

リーナを待つ輝彦

【SE・ノック】

※輝彦、はける

【SE・ドア開閉】

※輝彦、リーナ、登場

リーナ 「ありがとう」

輝彦 「どうしたの？テンション低いね」

リーナ 「さっきそこでカップラーメンの残り汁を奪い合うホームレスがいて、この街に嫌気が差しちゃった」

輝彦 「この街の治安も益々悪くなる一方だ」

リーナ 「あなたも物好きね、わざわざ日本から来るなんて」

輝彦 「後悔してるよ」

リーナ 「こんな仕事だけど、あるだけありがたいわ。さて、シャワー浴びる？それとも今すぐ始めますか？」

輝彦 「今日はそういうのはいいい」

リーナ 「そういうのはいいいって」

輝彦 「今日はそういうのは良くて、話をしてくれたら、それでいいよ」

リーナ 「ふーん、変わった人」

輝彦 「初めて会った日のこと覚えてる？」

リーナ 「…あの日は予報に無かった大雨が降って」

輝彦 「急いで僕はこのホテルに入った」

リーナ 「あの天気予報士、殺されちゃったね。いい人だったのに」

輝彦 「僕は婚約者に逃げられたばかりで寂しくて…」

リーナ 「男ってすぐに言い訳するのね。いいじやない別に娼婦くらい、いつでも呼んだって」

輝彦 「本当に寂しかったんだ」

リーナ 「はいはい。それにあの日、あなたは私を指名したわけじゃ無かったもんね」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

輝彦 「それは…」

リーナ

「別に怒ってるわけじゃないわよ（笑）あの日、あなたに指名されたユウミさんが体を壊したから、代わりに私がこの部屋に来た。あーユウミさんも殺されちゃったな。…いい人はすぐに殺される」

輝彦

「最初は僕が指名した女性が来ないって知って、怒ってキャンセルするつもりでいたんだ。でもドアを開けた瞬間、驚いたよ、この街にこんな可憐な女性がいたなんて」

リーナ

「お世辞が上手ね」

輝彦

「本当だよ。日記にだってそう書いてある」

リーナ

「こんな体を売ってるような女…あなた本当に物好きね」

輝彦

「君の体はこの街で一番綺麗だ！」

リーナ

「それは他の娼婦と比べて？」

輝彦

「あ、いや、そういう意味じゃ」

リーナ

「あなた、他の女性も買ってるんですよ？」

輝彦

「いや、それは、その」

リーナ

「はははは。そんなに動揺しなくていいわ。この街の女は買ってくれる男にみんな感謝しているの。こんなスラム街で私

輝彦

たちが生きていけるのはあなたのような男のおかげ。貧乏な上に私たちをただ蔑むだけしかできない男に比べたらあなたは何百倍も素敵だわ」

リーナ

「ありがとう」

輝彦

「ここで女が生きるには売れるものを全て売るしかない。でも、時折不安になる。私の春もいつまで売れるやら」

「毎晩、寝る前にこの街を変えたいと思う…でも、僕一人の力ではあまりにも無力だ」

リーナ

「ふふ、傲慢な人。この街の怒りも悲しみも、誰か一人ではなく、みんなで作ってるもの。一人の力で壊せるわけじゃないわ」

輝彦

「…街を出ようと思ってるんだ」

リーナ

「日本に戻るの？」

輝彦

「いや、日本には戻らない。どこか別の場所へ」

リーナ

「その方がいいわ。あなたはもつと色んな世界を見た方がいい」

輝彦

「一緒に来てくれないかな？…君のことを愛してる」

リーナ

「ありがとう」

輝彦 「…この街を出て僕と一緒に暮らそう」
リーナ 「嬉しい。でもそれはできないわ」
輝彦 「なんで…この街に嫌気が差したって言うてたじゃないか！」
リーナ 「嫌気が差してもここで暮らすしかないの」
輝彦 「いい人はすぐに死んでしまう。君だつて」
リーナ 「私は別にいい人じゃないもの。あなたとは違う。しぶとく生きるわよ」
輝彦 「…自警団の友人から聞いた…君と暮らしていた男が殺されたって」
リーナ 「…彼もいい人だったわ」
輝彦 「この街が憎いんじゃないか？」
リーナ 「憎いわよ。憎くてしょうがない。こんな街、今すぐ出て行ってやるって思った」
輝彦 「僕には君の悲しみは計り知れない。でも、僕はただ君の力になりたいんだ」
リーナ 「大きな湖のほとりに小さな家を建てて、お洋服を編んで暮らす、それが私の夢だった」
輝彦 「だったら、一緒にこの街を出よう！」
リーナ 「できないわ」
輝彦 「なんで!？」

リーナ 「あなたには分からないわ」
輝彦 「何が不満なんだ!他に好きな男でもいるのか？」
リーナ 「娼婦に嫉妬なんてみつともないわね」
輝彦 「教えてくれ!お願いだ…」
リーナ 「…:…:あなたが…あなたが…ピタツとしたTシャツを着てるからよ」
輝彦 「…僕がピタツとしたTシャツを着てるからだつて?」
輝彦 「気付いてないと思った?」
リーナ 「いや…」
輝彦 「じゃあ、私が何も思わないと思つた? あなたのそのピタツとしたTシャツを見て。そこまで落ちぶれた女じゃないわ」
輝彦 「そんなことで…」
リーナ 「そんなことつてなによ!あなた、自分がどれだけ深刻なことをしているのかわかっていないの?」
輝彦 「そんな言い方…」
リーナ 「ねえ、どうしてあんたはそんなにピタツとしたTシャツを着ているの?今日だけじゃない。会うたびに、私を抱くたびにあなたはいつもピタツとしたTシャツを脱ぐ。とても脱ぎづらそうにね」

輝彦 「何も特別なことじゃ」

リーナ 「特別なことよ！浮いてるじゃない！街

中でも…乳首も！あなたの乳首が浮いてるのを見る度に私はあなたのことが心配になるの」

輝彦 「僕の乳首なんか幾ら見られたって…」

リーナ 「私は嫌よ！隣の男の乳首が浮いていたら！」

輝彦 「僕の体は君だけのものだ」

リーナ 「勘違いしないで！論点がまるで違う。

私はただ恐ろしいのよ…ピタツとしたTシャツを普通に着るあなたの精神性が…」

輝彦 「…」

「それにあなたの体は私だけのものじゃないし、私の体も、あなただけのものではない」

「わかった。考える。Tシャツのことはどうかするよ」

リーナ 「無理ね」

輝彦 「どうにかする」

「絶対に無理！たとえ、ほんの少しの間、ゆったりめのTシャツを着たとしてもあなたはすぐにピタツとしたTシャツ

に手を出すわ。だってあなたはそうやって生きてきたんだもの」

輝彦 「そんなことない」

リーナ 「じゃあ、約束できる？もう二度とピタツとしたTシャツを着ないって」

輝彦 「それは…」

リーナ 「私を愛しているんなら、今すぐ全てのピタTを捨てて、二度とピタTを着ないって約束して！」

輝彦 「それは…できない」

リーナ 「でしようね。あなたは悪くないわ。ピタTの魔力に憑りつかれた男はみんなそうなるの」

輝彦 「僕の体は最早…ピタツとしたTシャツを着ないと服を着ていると感じない」

リーナ 「無理して変わる必要はないわ。私と別の道を歩めばいいだけ」

輝彦 「ピタTを…許してくれないか？」

リーナ 「無理よ」

輝彦 「お願いだ」

リーナ 「無理なの…私の父親もそうだった。ピタツとした父親だった…そのせいで母さんは…母さんと同じ思いをするのは嫌なの！」

輝彦 「僕と父親を一緒にしないでくれ！」
リーナ 「一緒よ。あなたも父もピタットしたピ
タ者同士よ」

輝彦 「…くそ。自分が憎い…」

リーナ 「…いつからピタTに手を染めたの？」

輝彦 「もうずっと前の話さ…この街の現状に
絶望して…それで…」

リーナ 「ピタの？」

輝彦 「ピタ」

リーナ 「この街にリーダーが…しっかりしたフ
アッションリーダーがいてくれれば、あ
なたもこうならずに済んだのにね」

輝彦 「全てこの街のせいだ…こんな…こんな
街…」

リーナ 「ふふ」

輝彦 「何がおかしい？」

リーナ 「あなたの婚約者が逃げた理由が分かる
わ。きつとあなたが全て周りのせいにし
て自分では何も背負わない軟弱者だか
ら、そして勿論ピタTを着ていたから
ね」

輝彦 「君に何が分かるんだ！」

リーナ 「分かるわ。今のピタTから逃れられな
いあなたを見ていたらね」

輝彦 「…お願いだ！僕と一緒に来てくれ！
(リーナを掴む)」

リーナ 「嫌だ！」

輝彦 「お願いだ！」

リーナ 「離して…いや…やめて！（輝彦を突き
飛ばす）」

輝彦 「うっ！」

リーナ 「舐めるんじゃないよ！私は春を売った
…体を買った…でもね、この魂は決して
売らないよ…ピタットしたTシャツを着
た男にはね」

輝彦 「くそ…くそ…（ナイフを取り出し）う
わー！」

リーナ 「うっ…」

輝彦 輝彦に刺されて倒れるリーナ

リーナ 「は…リーナ！そんな…僕は…僕はなん
てことを…今すぐ医者を…（部屋を出よ
うとする）」

輝彦 「待って…そんなピタTで外に出る
気？」

リーナ 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

輝彦 「リーナ…」

リーナ 「もういいのよ…この街から娼婦が一人
いなくなるくらい放っておいて…何にも
変わらないわ」

輝彦 「リーナ！…リーナ！（駆け寄り抱き上
げる）」

リーナ 「もっと長生きすると思ってたー。私っ
て案外いい人だったのかな」

輝彦 「君ほど素晴らしい人間はこの世にいな
い」

リーナ 「約束して…この街を諦めないって…」
輝彦 「…諦めたらそこで試合終了だもんね」

リーナ 「その言葉、私、嫌いな…二度と使わ
ないで」

輝彦 「わかった」
リーナ 「輝彦さん…ピタTはもうやめるんだ
よ」

輝彦 「うん…」
リーナ 「少しずつ…少しずつサイズ大きくすれ
ばいいから…」

輝彦 「うん…」
リーナ 「こんな街に生まれなかったら…私、体
売らずに済んだかな…あなたもピタTに
ならず済んだかな…」

輝彦 「僕は君と出会えて…幸せだった」

リーナ 「生まれ変わったら…私が体売る前に…
必ず捕まえて…」

輝彦 「湖でデートしよう」
リーナ 「その時は…ピタッとしたTシャツはや
めてね…」

輝彦 「うん」
リーナ 「今…気づいた…Vネックだ…」

リーナ、息絶える

輝彦 「う…う…（Tシャツをびりびりに破き
泣き叫ぶ）」

【L・暗転】

—了—